
現実の世界へようこそ

may.honda

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実の世界へようこそ

【Nコード】

N4565BA

【作者名】

may.honda

【あらすじ】

続編は出すかどうかわかりませんが、連載としたい方が後々楽なのでそうしています。

あらすじは「現実の世界に変な奴らがやってきた」ってことだけです。

短い文なのでとりあえず読んでみてください。

1章（前書き）

芸術作品をお求めの方は黙って電源のスイッチをお切りください。
小説をお求めの方で変化球がお好きな方は是非読んで行ってくださいまし。

1章

1章

1

アキーバのビルの一室にあるドルイーダの水飲み場にたむろしている5人組。僕を除き4人であるが、どうみても服装がおかしい。アキーバで目立つ服装つてのは滅多にないが何かのイベントでもないと思うと浮く服装ならいくらでもある。

「なあマスター。どっかで楽しんで稼げる仕事ない？」

神父の姿をした男がヒゲの生えたこの店の店長に聞いている。

「楽しんで稼げる仕事ならあるぜジョニー。お偉いさんの子供の体が悪くてな、ただ海外に行けるほどの体力がないんだと。それで肺を1つ欲しいんだとよ。さあどうする？」

「ほう。入院してる間にナースさんと出会えるかな？ そのまま何人とも恋愛に発展しちゃったりして、ハーレムとか」

「たぶん、それはないぞ。公にはされないはずだろうから小さい個人病院でやるだろうし、それに手術するのは爺さんと婆さんの夫婦だ。ジョニーが望む展開にはならないと思うぜ」

「じゃあやらない」

ジョニーは老人夫婦しかいないとわかると断るが、その前段階で断つとけよ思った。

「そ、そ、そんな女の人と出会わないからって仕事を断るのってよくないと思います」

今度はピンクの衣装を着たひ弱そうな女戦士がマスターに話しかけている。だが、どっからどうみても怒る点が違うだろと思う。

「キャサリン。たぶん、怒る点がズレてると思うぞ。臓器の売買なんてやってはいけないうてのが抑えるポイントだと思うよ」

マスターは的確に僕が思っていることを口にしてくれた。そもそも

もそんな話を盛ってこようとするな、とは思うがそれを言ったところではない。初めから断ることを前提にしてい、ちよつと考えるだけでも眉唾ものだからだ。

「ねー、そこのお姉さんちよつと遊んでかない？」

そんなことを言っているのは袈裟のような衣装を着た坊主頭の男だ。

「んーそうね。どうしようかな」

その女は少し乗る気になっている。それをおだてて女の気を引くらしい。

「ほら君ってブルドックの顔みたいで愛嬌があるじゃん」

「最低！」

そついわれ店内に響き渡るほどの乾いた快音を響かせたピンタを男の頬に入った。

容姿はいかにもハゲな武闘家は愛嬌の良さを言いたかつたらしいが、褒める言葉があきらかに違う気がした。ちなみに彼の名前は権蔵^{そつごん}である。

騒いでいる連中の中でマスターに話かけられる程に大人しい日本人が一人いる。その男は頭に白いターバンを巻き、とても古いマンツのようなものを羽織っている。

「おいマイケル。もういっぱい飲むか？」

「自分、酒はあまり呑めないゆえ、いらないでがんす」

おいおい、どこが酒だ。それは果汁1000%のジュースじゃないか。絶対に一桁違うと思うが商品がそう名前なのではない。「そうかい。ほどほどにしとけよ。酒とか本気で思っているのなら、医者へ連れて行かないといけないからな。それに語尾がおかしいぞ」

やはりマスターも同じことを思っていたらしい。

そろそろ行くかと席を立とうとする。そこへ依頼が舞い込んできた。僕はその依頼を断ろうとしたが、他の4人がやる気満々である。

他の4人に押し出される形で僕の反対意見は却下された。

いいかい。そこへ行くには、ここをこう行くとここに出るから、そのまま真っ直ぐ行けばたどり着くから。いつてらっしゃい。

こんな簡単な説明を地図に合わせて指示する。

「これとそれだけじゃわからないよ」

キャサリンが言ってきた。

「そうだよ。お前もこいよ」

「道がよくわかってないゆえ来てくれると助かるでござる」

また語尾が変わつてると思つたが、来てほしいと言われたら行くしかないのがこのメンバーの鉄則である。

「そうだぜー、ユーが来ないと何も始まらないぜ」

こいつにだけは頼まれても絶対に動きたくない。似合つてないし、かつこつて言われたのがうざつたい。

しょうがない行くぞ、と声をかけ店を出た。

人通りのある道に出るとやはり道行く人の視線が気になる。その原因の本人たちは何も感じてないらしい。

「ねーマイケル。あんな子はどうだい？　かわいくないか」

「ジョニー、おぬしは神官ゆえ控えた方がよろしいのでは？」

「いいんだよ。女は神秘的な生き物なんだぜ。絵画とか見てみるよ。かなり官能的に描かれてるぜ。あの子なんて見てみるよ、おっぱいが程よい大きさだぜ」

あれは95%の確率でパットが入っているぞと、言つてやろうかと思つたが黙る。この手の願望を砕くのは簡単だが砕いた後に何も残らないからだ。決して、パットじゃなければいいと思つたわけでない。

「キャサリン、おっぱい見せちゃいなよ」

チャライ大馬鹿やろうが余計なことを言い始める。

「何を言ってるんですか」

重くて引きずっていた剣をジャイアントスイングの要領で振り回

した。

その鞘から抜かれていない剣が僕の後頭部にヒットした。重い剣なら軽い剣に代えろよ、そして俺を巻き込むな。

「ご、ご、ごめんなさい」

振り回した本人に謝られた。

「ユー、謝っているんだから許してやれよ」

お前が原因だろ、と権蔵の頭を小突く。

しばらく歩くと目的地に着き、そこは人で溢れかえっていた。

どうやら僕らに敵対心を抱いているらしく、少し格闘技の経験がある連中が構えている。それもそうだ、戦士のかっこうに剣を引きづっている女。それに神官の服装に木の杖を持っているやつ、盗賊を連想させるような浮浪者のかっこうをしているやつに坊主頭で歩いていてもかっこつけていると一目でわかる男3人。

警察に通報されないのがおかしいレベルの4人組だ。

僕は少し離れている場所で見っていた。いざ、人の集まっているところに行くとは恥ずかしいじゃん。どうでもいいことだが、じゃん、の語尾からわかるように僕は神奈川出身だ。

どうやらバトルが始まったらしい。

大きいお友達ABCが現れた。

大きいお友達Aは見守っている。

大きいお友達Bは目を合わせないようにどこかを向いている。
(じゃあ出てくんないよ)

大きいお友達Cは威勢よく叫んだ。「かえれ」

ジョニーは鼻をほじった。キャサリンは怯んだ。マイケルは聞いていなかった。権蔵は眼中にないのかシカとした。

マイケルのターン。

大きいお友達Cから1漱石を盗んだ。

大きいお友達Cに精神的ダメージ。(パクられればショックだわな)

権蔵は挑発した。「やーい。お前ら彼女いんの？」（お前もいないだろボケエ）

大きいお友達ABCは憤慨した。（あーあ、権蔵もフラれてばっかでないのになあ）

キャサリンはビビって何もできない！

ジョニーのターン。

カメラを取り出して周りを撮影し始めた。

パシャパシャ。（あいつこんな時に集まってきた女を撮ってやがる）

ジョニーは女から罵声を浴びせられた。

「お前なんか撮ってねーよ。豚メガネ」

追加攻撃で今度は石と罵声が飛んできた。（そりゃそつだろ。怒って当たり前だ）

ジョニーはダメージを受けた。

大きいお友達Aのターン。

「ここはボキが守るんだな」手を広げ二人を守る。

大きいお友達Cのターン。

「いや、ここはボキが守る」一歩前へ出て手を広げた。

大きいお友達Bのターン。

「じゃあボキが守るよ」

大きい友達AC

「どうぞどうぞ」

大きい友達Bが前に出てきた。

マイケルのターン。

マイケルは大きいお友達Bから5漱石を盗んだ。

大きい友達Bは泣いて逃げて行った。（僕でも泣いて帰るわ）権蔵のターン。

大きいお友達Cに突っかかる。

「おい、ざけんなやボケ。道開けろや」

大きいお友達Cは逃げ出した。

ジョニーのターン。

石を投げられダメージを受け集中できていない。

キャサリンのターン。

まだビクビクしていて動けない。

大きいお友達Aのターン。

「ごめんなさい」

大きいお友達Aは逃げ出した。

バトル終了。

権蔵は6 漱石を手に入れた。

4人は建物の中に入って行った。僕もタイミングを遅らせて中に入る。そうすると階段を上りイベントスペースのような場所にたどり着くと、そこには先ほど見た大きいお友達が同じうちわを持ってたくさんいた。

あの4人がやはり係りの人に囲まれていた。耳を傾けていると何やら追い出されそうになっているらしい。そりゃ、変な衣装を着た4人組なんてものは中に入れない方が、もめごと起こらないからイベントの運営としては楽になるだろう。

何やらジョニーは係りの人の胸を触ろうとして、ビンタを食らっているようだ。そりゃ、囲まれて追い出されるわ。鼻の下を伸ばしてるし警察が来たら言い逃れできないぞ。

キャサリンはあの衣装のおかげでカメラで無断で撮られまくっていた。まー、恥ずかしがっているしリアクションは間違ってないけど、あきらかに着て行く服を間違えている。

マイケルはキャサリンがかつてに撮影されていたカメラをひたすら盗んでいた。漱石に加えてカメラも盗るのか。しかも正確に撮影していたカメラだけを捕っている。さすがだ。

権蔵はイベントに来ていた綺麗な女の子をナンパしている。やっぱりダサいくせに恰好つけているのが気に食わない。おまわりさんアイツだけですってなれば今すぐに通報しよう。

おいおい、あの馬鹿たちがどんどん囲まれていくぞ。4人ともこっちに向けて手を振ってきた。よし他人のふりをしよう。僕は無関係ですよーと。僕は目を合わさないように視線をそらすと警備員の人がやってきた。

やっぱりバトルが始まった。

警備員A Bが現れた。

警備員Aのターン。

警備員Aの口撃「今すぐ出て行きなさい」

ジョニーは邪魔をされ不機嫌になった。（邪魔されて当たり前だ）
キャサリンはカメラ撮影が止まらず困っている。（うん、間違っ
てないよ）

マイケルは56個あったカメラの最後をカメラを盗んでいる。（
お前は本物腕前だよ）

権蔵はナンパを邪魔され警備員を睨みつけた。（帰れ、そして捕
まっていこい）

警備員Bのターン。

表に引きずる。

マイケルはサラリと身をかわした。

マイケルのターン。

分身の術。回避率アップ。

権蔵のターン。

警備員Aに右ストレート。（おい、やめろ捕まるぞ。このほか）
人の足に引っかけられた。ミス。権蔵は小さいダメージを受けた。
ジョニーのターン。

コワモテの顔になり警備員Aの胸ぐらをつかむ。「おい、俺の邪
魔すんな」（間違ってますよ。絶対に君は正しくない）

警備員Aは少しビビった。攻撃力ダウン。

キャサリンのターン

キャサリンの口撃「勝手に盗撮するのはやめてくださいー」（う
ん。やっぱりリアクションは間違っていないよ。でもね、盗撮は許可

を取った時点で盗撮じゃないと思うんだ。それに……)

ミス。すでにマイケルが盗り終えていた。

警備員Aのターン。

ビビって足が動かない。応援を呼ぶ。

無線機でどこかへ呼びかけた。

警備員Bのターン。

避難指示「みんなにげてー」(具体的な指示をはよ出せ！)

「……」(出さないのかよ)

ミス。出入り口が混乱した。そして僕はガックリうなだれた。

マイケルのターン。

盗む。

警備員Aの無線機を盗んだ。

権蔵のターン。

引っ掛けられた大きいお友達に突っかった。「何してくれとん

じやいポケエ！」

相手のカウンター。「エセ関西弁でなに言うトンじやいアホ。し

ばくぞ」

そのまま殴られ権蔵の精神に大ダメージ。

殴られたショックで戦闘不能になった。(あのバカ……)

ジョニーのターン。

杖を回し風を起こす。

警備員ABを吹っ飛ばした。

そのまま女の係員の服まで吹っ飛ばした。(よくやった！ さす

が一流の神官や)

「キヤー最低！」

そのままカウンターで平手ウチを頼にくらう。アゴに入りクリテ

イカルヒット。

ジョニーは戦闘不能になった。

警備員ABを倒した。

バトル終了。

マイケルは無線機を手に入れた。
そのままステージの方へ歩いて行く。
そうすると次は声優Aが出てきた。

マイケルのターン。

使用済みマイクを盗んだ。

キャサリンのターン。

奪ってきたカメラを踏みつぶす。

周りの人へ大ダメージ。目を覆って絶望を感じている。

声優のターン。

声優は呼びかける。「みんな助けてー」

大きいお友達が一斉に前に立ちはだかる。

キャサリンのターン。

不死鳥の尻尾を使った。

ズボン脱がしジョニーのお尻の穴に刺す。(ってバカ！ 使い

方間違ってるって)

「そこはダメえええええ」

ジョニーは立ち上がった。(なぜ戦闘不能から治ったんだ……)

権蔵のターン。

クナイを投げる。

声優の服を少し切り裂いた。(お、ちょっとエロいぞ)

ジョニーのターン。

杖を上に掲げ声優に水を落とした。

声優の服が透けた。(アウト！アウト！ 色々とアウト！)

立ちはだかっていた大きいお友達の敵意が下がった。

声優のターン。

泣く。「ヴえーん。誰か助けてよー」

大きいお友達の一部がこちらに近寄ってきた。

キャサリンのターン。

「こないでこの変態！」(勝手に写真を撮られた君以外の3人の
方が変態だと思います)

引きずっていた剣を両手で台風の中心にいるように振り回した。
近づいてきた大きいお友達を吹っ飛ばした。

権蔵のターン。

さらにクナイを投げつける。

盾になつていた大きいお友達のメガネにヒット。メガネが割れた。
声優のターン。

「もう怒ったよ」怒りに満ちて机を投げ始めた。

4人まで距離が届かず、手前の大きいお友達たちにヒット。（倒
れてる人が多くて地獄絵図のようになってるぞ）

生き残った大きいお友達たちは去って行った。

ジョニーのターン。

杖をもう一度掲げ今度は周りの女の人に水をかけた。

髪と服が濡れ、服が透け艶めかしいセクシーな感じになった。（

お前はゴッドだ。神だ！）

キャサリンのターン。

不死鳥のムチで机の下敷きになった大きいお友達を叩き始めた。

「エイ、エイ」とピシピシと叩く音がこだまする。

大きいお友達たちが蘇った。

キャサリンのいうことを聞くようになった。（あ、こいつらも変
態だ。しかももう一回叩いてほしいとか目覚めちゃったよ）

「コラ！ 君たち何をやってるんだ！」

警察官A B C D E F Gがやってきた。

警察官Aのターン。

警察官Aの口撃。

「手をあげる打つぞ！」

銃を構えた。

キャサリンは手を挙げた。

ジョニーも手を挙げた。

マイケルはサッと隠れた。

警察官Bのターン。

警察官Bの口撃。

「確保おおー！」

ジョニーとキャサリンは捕まった。

僕はおまわりさん、こいつ忘れてますよと、権蔵を指さす。

警察官は無線で呼びかけた。どうやら救急車を呼んだらしい。
チッしぶとい奴め。

3

数時間後、捕まった二人がマスターに話しかけていた。

「キャサリンが勝手に写真を撮られたから怒ったんだって言った
から見逃してくれたよ」

ジョニーがマスターにそう言った。

胸を触ろうとしたことは言わなかったらしい。そりゃそうだな。
な。

「嘘は良くないだろ。ジョニーのことだから係りの人の体でも触
ろうとしたんじゃないのか？ そうだろキャサリン」

マスターは全てわかっていているぞと言わんばかりの先読みをし、キ
ャサリンに話をふった。

「そうですよ。ジョニーさん嘘はいけませんよ。神父様が」

「神父じゃないもん。神官だもん。それに体を触ろうとして何が
悪い」

口をへの字に曲げてジューズを煽る。

ジョニーは神官やめろよ。その振る舞いは神に仕えちゃだめだろ

……。

「権蔵はビンタをされて倒れて救急車だっけ？ 情けないな」

マスターが今度は権蔵に話しかけた。

「いや、グーパンだよ。アゴに入って脳が揺れちゃってね。それ
で、はつきり覚えてないんだけど、誰かが警察官にこいつも捕まえ
てくれて言ってた気がするんだ。でも思い出せないんだ」

あーそれは僕だよと、ニツコリ笑い伝えようかと思ったがやめた。わざわざ喧嘩になることを言うべきではないからだ。

「それでマイケルは警察に来たときには隠れたんだっけ？」

「せっしや不器用ゆえ隠れ蓑術を使っただけでござんす」

もう不器用のレベルじゃないよな？　むしろ器用なレベルだよな？

「本来なら何事もなかったかのように振る舞うのが器用なのでござんす。まだまだ未熟で不器用ゆえそうするしかなかったでござんす」

「次はござんすかい。それに最後はござんすになってたよ」

マスターが指摘するとマイケルは、また不器用ゆえなど言い始めた。

「マスターこれ依頼品ゆえ渡しといてくれ」

そついうとマイケルはマスターにマイクを渡した。

その後僕たちはそれぞれ別れ家に帰り、ニュースを見るとテレビでアキーバの事件がニュースになっていた。

「最近、変な事件が多いわね。カメラで撮られて声優さん含めて袋叩きにしようとしたとか。それに机を持って声優さんが暴れたとか、ちよつとついていけないわ」

そ、そ、そつすねと、苦笑いを浮かべるしかない。

「あんた、そついう人と付きあつたらダメよ」

僕はそついう人とは一線を引いてるからと、笑いながら答えるしかなかった。

まさか騒ぎを起こした本人達とつるんでいるとか今さら言えるわけなく、おそらく墓場まで持つて行くことになるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4565ba/>

現実の世界へようこそ

2012年1月12日12時53分発行